

「生きがい感」の特徴 —生活満足度との比較—

安藤 令、西原 照雅

August 2026



内閣府経済社会総合研究所
Economic and Social Research Institute
Cabinet Office
Tokyo, Japan

ESRI Research Note は、すべて研究者個人の責任で執筆されており、内閣府経済社会総合研究所の見解を示すものではありません（問い合わせ先：<https://form.cao.go.jp/esri/opinion-0002.html>）。

ESRI リサーチ・ノート・シリーズは、内閣府経済社会総合研究所内の議論の一端を公開するために取りまとめられた資料であり、学界、研究機関等の関係する方々から幅広くコメントを頂き、今後の研究に役立てることを意図して発表しております。

資料は、すべて研究者個人の責任で執筆されており、内閣府経済社会総合研究所の見解を示すものではありません。

The views expressed in “ESRI Research Note” are those of the authors and not those of the Economic and Social Research Institute, the Cabinet Office, or the Government of Japan.

「生きがい感」の特徴 －生活満足度との比較－¹

安藤 令（内閣府経済社会総合研究所政策調査員）
西原 照雅（前内閣府経済社会総合研究所主任研究官）

要旨

近年、経済的な豊かさ、心身の健康、さらには社会的なつながりなど、多様な側面を包括的に捉える well-being の視点を取り入れた政策の推進が、国内外においてより重要視されている。OECD が公表しているガイドラインでは、主観的 well-being を構成する要素の一つとして、人生の意義や目的意識に関わるエウダイモニアが位置付けられている。

本稿では、0～10 点の尺度を用いて測定した生きがい感と生活満足度を比較し、それぞれに影響を与える生活分野の違い、並びに属性別の傾向について分析を行った。

分析の結果、生きがい感と生活満足度の相関係数は 0.68 であり、分布の形状や平均値には差異が見られた。重回帰分析の結果からは、家計と資産、仕事と生活（ワークライフバランス）、健康状態、交友関係やコミュニティなど社会とのつながりといった分野は、生きがい感と生活満足度の双方に関係する一方、政治・行政・裁判所への信頼性や自然環境といった分野は生きがい感のみに、雇用環境と賃金、住宅、自身の教育水準・教育環境といった分野は生活満足度のみに相対的に強く関係することが示された。

さらに、世帯年収、就業状況、健康状態、社会的つながりなどの属性別に両指標を比較したところ、いずれの属性でも、多くの層において生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高い傾向が確認された。また、経済的・社会的・健康面で相対的に不安定な状況にある層では、生きがい感と生活満足度の差が小さくなる傾向が見られた。このことは、生きがい感と生活満足度の関係は、個人を取り巻く社会経済的状況や健康状態、心理的要因によって異なる可能性があることを示唆していると考えられる。

なお、本稿の分析には条件統制の制約があり、今後はサンプルサイズの拡充や継続的なデータ蓄積を通じて、さらなる検証が求められる。

¹ 本稿を執筆するにあたっては、（一社）A luten 代表・（公財）福岡アジア都市研究所フェローの菊澤育代氏、内閣府経済社会総合研究所の野村裕所長、松多秀一次長、植田広信総括政策研究官、松下美帆総務部長、政策統括官（経済社会システム担当）付参事官（総括担当）付の上野由加里参事官補佐、和田里奈子行政実務研修員、青木翔大事務官から有益なコメントを頂いた。ここに記して謝意を表す。なお、本稿で示された内容や見解はすべて筆者によるものであり、所属する機関のものではない。また、ありうるべき誤りは筆者の責に帰する。

目次

1. はじめに.....	3
2. 関連研究.....	5
3. 研究の目的・方法および分析結果	7
(1) 本稿の目的	7
(2) データセットの概要.....	7
(3) データ分析の内容と結果	8
4. 考察.....	14
5. おわりに.....	16
参考文献	17
参考図表	19

1. はじめに

近年、経済的な豊かさ、心身の健康、さらには社会的なつながりなど、多様な側面を包括的に捉える well-being の視点を取り入れた政策の推進が、国内外においてより重要視されている。

2013 年、OECD は、主観的 well-being を測定するためのガイドライン”Guidelines on Measuring Subjective Well-being”（以降、「OECD ガイドライン」という。）を公表した¹。OECD ガイドラインでは、主観的 well-being は、「生活評価²」、「感情」、「エウダイモニア（eudaimonia）」の 3 要素から構成されるという概念的枠組みが示されている。このうち、エウダイモニアは、次のようにされている³。

「広くは「自分が良く生きている」と感じることであり」、「人生における意味や目的、自律性の感覚に加えて、自己受容、有能感、そして個人的成長を含む概念である。」

また、OECD ガイドラインでは、生活評価、感情、エウダイモニアの 3 要素それぞれについて、測定のための代表的な設問が中核的なモジュールとして設定されている。さらに、これらの中核的なモジュールに関連する複数の設問を併用して尋ねることも想定されている。なお、いずれの設問についても、0～10 点の尺度を用いることが示されている⁴。

Mahoney (2023) によると、2013 年の OECD ガイドラインの公表以降、主観的 well-being の測定に関して次のことが指摘されている。まず、国として生活の質や幸福を総合的に把握・評価する取組みを行っている 27 の OECD 加盟国のうち、89%が主観的 well-being を指標として取り入れている。その内訳は、生活評価を計測している国が 85%、感情を計測している国が 56%、エウダイモニアを計測している国が 33%である。一方、OECD 加盟国全体で見ると、生活評価については、約 90%の国が、0～10 点の尺度を用いるなど OECD

¹ OECD ガイドラインは 2025 年 10月に改訂された。

² OECD ガイドラインによると、「生活評価」とは、「ある人の生活またはその特定側面に対する自己評価」と定義される。

³ 原文は、“Eudaimonia is broadly defined as a feeling that one is living well, and pertains to whether individuals perceive that the things they do in life are worthwhile and have meaning, and whether they feel competent and autonomous and have a sense of personal growth and self-acceptance.”となっている。

⁴ 例えば、生活評価に関する代表的な設問として、「全く満足していない」を 0 点、「非常に満足している」を 10 点とし、現在の生活にどの程度満足しているか点数を尋ねることが提示されている。

ガイドラインとの比較可能性を有する形で測定しており、80%を超える国が年 1 回以上の頻度でデータを収集している。これに対し、感情については、ほぼすべての OECD 加盟国が測定しているが、回答尺度や想起期間などの測定方法は統一されていない。OECD ガイドラインでは、エウダイモニアを測定する代表的な設問として、人生における行動の意義をどの程度感じているかについて、0～10 点の尺度で尋ねる設問などがある⁵。しかしながら、生活評価や感情と比べ、OECD ガイドラインで想定される形でエウダイモニアを直接測定している国は限定的である。日本においても、0～10 点の尺度によりエウダイモニアを直接測定した例は多くない。

内閣府は、2019 年から毎年実施している「満足度・生活の質に関する調査」（以降、「生活満足度調査」という。）において、2025 年に初めて、エウダイモニアに関連する主観指標について 0～10 点の尺度で尋ねる設問を設定した⁶。この設問では、エウダイモニアについて、自分は充実した人生を送れているかどうかを尋ねている⁷。

このように、エウダイモニアについては、関連指標を用いた部分的な把握にとどまっている状況である。エウダイモニアについて、一定の尺度等が国際的にも定まっていないう中で、日本における「生きがい」という言葉は、人生の意義や目的意識などを含む点で、エウダイモニアと類似するものと考えることができる。このことから、内閣府経済社会総合研究所（以降、「ESRI」という。）では、エウダイモニアを測定するための最適な設問の検討に資することを趣旨として、より直接的に「生きがい」について尋ねるアンケート調査を実施した。さらに、主観的 well-being の多面的な把握を可能とするべく、「生活評価」と「生きがい」の両方を尋ねることとした。本稿では、両者の結果を比較することで、両者の特徴を明らかにすることを目的とした。

⁵ この設問では、「全く意義を感じない」を 0 点、「完全に意義がある」を 10 点とし、自身の人生における行動の意義がどの程度あると感じているか、点数を尋ねることとしている。

⁶ それまで同調査では、個人の内面にも深く関わる尺度を政府の立場で扱うことに対して慎重であるべきとの考えから、心の健康状態や「仕事のやりがい」の有無、「生きがい」の有無など、主観指標ではあるが相対的にある程度の客観的視点も確保され则认为られる設問を設けるにとどめていた。

⁷ 「自分は充実した人生を送れていると思う。」という指標について、「全くあてはまらない」を 0 点、「非常にあてはまる」を 10 点として何点くらいになると思うかを尋ねている。

2. 関連研究

生きがいに近い概念や指標を測定した研究として、次の例がある。

古谷野（1981）は、改訂 PGC モラール・スケール⁸を使用し、都市部在住高齢者、農村部在住高齢者、および就労・社会参加意欲の高い高齢者集団という属性の異なる 3 群を対象に高齢者のモラールを測定した。得点（合計は 0～17 点）の平均値はいずれの群においても約 10～11 点とほぼ同程度であり、集団間に有意な差は認められなかった。

佐藤他（1993）は、「人生の意味・目的」を測る Purpose in Life Test⁹を和訳し、高適応群（社会において人生の意味、目的の実現に向けて積極的に活動していると思われる人々を予め選定）、成人群、不適応群、精神科患者群などの集団を対象に実施した。得点（合計は 20～140 点）の平均値は、高適応群で約 119 点、一般成人群で約 94 点、精神科患者群で約 84 点と段階的に低下する傾向が確認された。

今井他（2012）は、生きがい意識尺度「Ikigai-9¹⁰」を用いて、60 歳以上を対象に、生きがいを感じている精神状態を測定するとともに、健康関連 QOL（精神的健康度と身体的健康度）の評価尺度との関連性を検討した。「Ikigai-9」の得点（合計は 9～45 点）の平均値は 33.3 点であり、精神的健康度と中程度の正の相関を示し、身体的健康度とはほぼ無相関であったことが報告されている。

0～10 点の尺度を使用した研究として、熊野（2017）は、乳幼児の父親・母親を対象に、

⁸ 心理学者 M. Powell Lawton により開発された高齢者向けの「モラール」の評価尺度であり、「心理的安定」、「老いに対する態度」、「孤独感」といった側面から高齢者のモラールを多面的に捉えることを目的としている。17 項目 2 件法（肯定的回答は 1 点）で構成され、合計得点は 0～17 点となる。ここでいう「モラールが高い」とは、「自分自身について基本的な満足感をもっていること」、「環境の中に自分の居場所があるという感じをもっていること」、「努力しても動かし難いような事実を事実として受容できていること」とされる。これを古谷野は日本語の「生きがい」に近いものと考えた。

⁹ 心理学者 James C. Crumbaugh らによって、「人生の意味・目的」を定量的に測定するために考案された。Part A（質問紙法 20 項目 7 件法）、Part B（文章完成法 13 項目）、Part C（自由記述 1 項目）から構成される。Part A では各項目の点数を加算し、得点が高いほど人生に意味や方向性を見出している状態を示す。

¹⁰ 生きがいを感じている精神状態（生きがい意識）を測定する 9 項目 5 件法からなる尺度であり、9 項目の総得点（9～45 点）、およびそのうちの下位尺度 3 項目の得点（3～15 点）から構成される。この尺度における「生きがい意識」とは、「現状の生活・人生に対する楽天的・肯定的感受と、未来への積極的態度、および、社会との関係における自己存在の意味の肯定的認識から構成される意識」である。

現在の生きがい感と子ども誕生前の生きがい感を 0～10 点の尺度で尋ねた¹¹。現在の生きがい感の平均は全体で約 7.6 点、子ども誕生前の生きがい感の平均は全体で約 6.7 点であった。子ども誕生後に生きがい感が上昇した者の割合は専業母親で 62%と最も高く、低下した者の割合は共働き母親で 14%と最も高かったことが報告されている。

¹¹ 生きがい感について、「とても生きがいを感じている（感じていた）」を 10 点、「まったく生きがいを感じていない（感じていなかった）」を 0 点としてそれぞれ何点くらいになると思うかを尋ねた。なお、当該研究では、生きがいを感じている精神状態を複数の項目（人生肯定感、存在価値感、人生の意味感、生存充実感に関する項目）により測る尺度（12 項目 6 件法）、生きがいを感じている精神状態になるためのプロセスを複数の項目（過去の意味づけ、未来の目標意識、ポジティブ状況の没頭、ネガティブ状況の受容、ネガティブ状況の対処に関する項目）により測る尺度（15 項目 6 件法）も併用されている。

3. 研究の目的・方法および分析結果

(1) 本稿の目的

内閣府は、2025 年 3 月に実施した生活満足度調査において、新たに、エウダイモニアに関連する主観指標を設問に取り入れた¹²。この設問では、「自分は充実した人生を送れていると思う。」という指標が設定され、0～10 点の尺度で評価する形式が採用されている。また、生活満足度調査実施後の 2025 年 10 月に改訂された OECD ガイドラインを踏まえると、エウダイモニアは、人生の意義や目的意識、自律性、自己受容感、有能感、自己成長の実感などを包含する概念とされており、さらに多角的に検討する必要もあると考える。

そこで、本稿は、人生の意義や目的意識などを含む点で、エウダイモニアと類似するものと考えられる「生きがい」という言葉を用いてアンケート調査を行った結果を使用する。具体的には、同アンケート内で尋ねた生きがいを感じている程度と生活評価を比較することで、両者の特徴を明らかにすることを目的とする。以降、本稿では、「生きがいを感じている程度を点数化した値」を「生きがい感」、「生活評価を点数化した値」を「生活満足度」と呼ぶこととする。

(2) データセットの概要

本稿で使用するデータセットは、ESRI が 2024 年 11 月～12 月に実施したアンケート調査（以降、「ESRI 調査」という。）の結果である。ESRI 調査は、全国の 15 歳～89 歳の男女を対象としたウェブ調査であり、サンプルサイズは 2,127 である。回答者の居住地域、性別、年齢構成が令和 2 年国勢調査の人口比に近似するように回答を収集した。表 1 に ESRI 調査の回答者分布と令和 2 年国勢調査の人口分布を男女別・年齢階層別に示す。なお、ESRI 調査は 15～89 歳を対象としているため、国勢調査の人口分布は 15～89 歳の人口を抽出している。両分布を比較すると、いずれの層においても大きな乖離は見られない。

生活満足度については、内閣府が実施している生活満足度調査と同様に、以下の設問を設けている。

¹² 同調査では、エウダイモニアに関連する主観指標に加え、「主観的な社会との信頼関係」に関連する主観指標も新たに設問に取り入れている。周囲の人々や社会と自身の関わりについて多角的に評価するために、「周囲の人々に認められていると感じる。」「自分は周囲の人々や社会の役に立っていると思う。」「周囲の人々と違うことを言ったりしても、受け止めてもらえると感じている。」「自分の人生が様々な人々に支えられていると感じる。」の 4 指標を設定し、これらについても、エウダイモニアに関連する主観指標と同様に、「全くあてはまらない」を 0 点、「非常にあてはまる」を 10 点として何点くらいになると思うかを尋ねている。

- ・ あなたは全体として現在の生活にどの程度満足していますか。「全く満足していない」を 0 点、「非常に満足している」を 10 点とすると、何点くらいになると思いますか。

生きがい感については、生活満足度の尺度を参考に、以下の設問を設けている。

- ・ あなたは全体として生きる目的や生きる意味といった生きがいをどの程度感じていますか。「全く感じない」を 0 点、「非常に感じる」を 10 点とすると、何点くらいになると思いますか。

生活満足度と生きがい感を尋ねた上で、13 の分野別主観満足度を尋ねている。具体的には、「1. 家計と資産」、「2. 雇用環境と賃金」、「3. 住宅」、「4. 仕事と生活（ワークライフバランス）」、「5. 健康状態」、「6. あなたご自身の教育水準・教育環境」、「7. 交友関係やコミュニティなど社会とのつながり」、「8. 政治・行政・裁判所への信頼性」、「9. 生活を取り巻く空気や水などの自然環境」、「10. 身の周りの安全」、「11. 子育てのしやすさ」、「12. 介護のしやすさ・されやすさ」、「13. 生活の楽しさ・面白さ」それぞれについて、「全く満足していない」を 0 点、「非常に満足している」を 10 点とすると、何点くらいになると思うか、0～10 点の 11 段階の尺度で尋ねている。さらに、家族の満足度、仕事の満足度、過去 1～2 年間の仕事の出来、過去 4 週間の仕事の出来についても同じ尺度で尋ねている。

また、信頼度について、ほとんどの人、知人、国会、警察、行政サービスについて、「全く信頼していない」を 0 点、「非常に信頼している」を 10 点とすると、何点くらいになると思うか、0～10 点の 11 段階の尺度で尋ねている。

上記の他、世帯の年収および金融資産、最終学歴（見込み）、就業状況、健康状態、ストレスの有無、孤独感の有無等を尋ねる設問を設けている。

(3) データ分析の内容と結果

1) 基本統計量

生きがい感と生活満足度の基本統計量を表 2 に示す。表には、全体に加え、男女別、年齢階層別の基本統計量を示している。ここで、年齢は、生活満足度調査に倣い、40 歳未満、40～64 歳、65 歳以上の 3 区分とした。全体的に、生きがい感より生活満足度の方が高い傾向がある。例えば、全体の平均値は、生きがい感が 5.71、生活満足度が 5.95 である。男女別、年齢階層別にみると、生きがい感と生活満足度は同じような傾向を持つことがわかる。すなわち、男女別では、女性の方が高く、年齢階層別では、40 歳～64 歳が最も低く、65 歳以上が最も高い。加えて、標準偏差を見ると、65 歳以上はばらつきが小さい傾向がある。

生きがい感と生活満足度の分布を、全体、男女別、年齢階層別に、図 1～図 6 に示す。全体の分布を見ると、生きがい感、生活満足度ともにふた山の分布となっているが、生きがい

感は5点、生活満足度は8点に回答が集中していることに特徴がある（図1）。男性の分布（図2）を見ると、生きがい感は5点が約25%に達しているのに対し、生活満足度は5～8点が多いのが特徴である。女性の分布（図3）は男性の分布と異なり、生きがい感は5点に集中していること、生活満足度は8点に集中していることに特徴がある。また、40歳未満の分布（図4）を見ると、生きがい感は5点に集中しているのに対し、生活満足度は5～8点が多い。40～64歳は、生きがい感は5点が25%を超えていることに特徴があり、生活満足度は5～8点が多い。65歳以上は、生きがい感は5～8点が多いのに対し、生活満足度は8点が30%弱に達していることに特徴がある。

表3に生きがい感と生活満足度のクロス表を示す。表より、回答は対角線付近に集中しているが、対角線の下方にもやや広く分布しており、生きがい感は生活満足度と比べて低めに評価される傾向が見られる。生きがい感と生活満足度の相関係数は0.68であった。概観すると、生きがい感と生活満足度の差が0～2点の範囲の割合が高い傾向が見られる。生きがい感の最頻値である5点を見ると、生活満足度のばらつきが大きい傾向が見られる。

図7～図8に生きがい感と生活満足度の平均値を男女別、年齢階層別にそれぞれ示す。図中のエラーバーは95%信頼区間であり、「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。生きがい感と生活満足度は、いずれの区分においても、5%水準で有意な差がある。

2) 重回帰分析と属性別の比較

本稿では、生きがい感と生活満足度に影響を与える要因を把握するため、重回帰分析を行った。ここで、被説明変数は、生きがい感もしくは生活満足度とし、説明変数は分野別主観満足度とした。結果を表4に示す。係数が10%水準未満で有意となった生活分野に着目すると、生きがい感もしくは生活満足度のみに影響する生活分野、両方に影響する生活分野がある。生きがい感のみに影響する生活分野は、政治・行政・裁判所への信頼性と生活を取り巻く空気や水などの自然環境であり、生活満足度のみに影響する生活分野は、雇用環境と賃金、住宅、自身の教育水準・教育環境であった。また、両方に影響する分野は、家計と資産、仕事と生活（ワークライフバランス）、健康状態、交友関係やコミュニティなど社会とのつながり、介護のしやすさ・されやすさ、生活の楽しさ・面白さであった。

ここからは、重回帰分析により、生きがい感や生活満足度に影響することがわかった生活分野を対象に、様々な属性を用いて回答者を区分し、平均値を求めた。以降の図において、図中のエラーバーは95%信頼区間、「※」は同一区分内で生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。なお、一部、サンプルサイズが少ない区分があることに留意が必要である。

家計と資産に関連した属性として、世帯年収別（図9）、世帯金融資産別（図10）に区分した結果を示す。世帯年収別の結果（図9）を見ると、世帯年収が高いほど、生きがい感、

生活満足度ともに平均値が高い傾向がある。また、全体的に生きがい感と比較して生活満足度の平均値が高い。世帯年収が低い区分では、生きがい感と生活満足度の間にほとんど差がないが、世帯年収が高くなることに伴い、両者の差が大きくなる傾向がある。この差は、世帯年収が 300 万円未満の範囲において 5%水準で有意ではない。世帯金融資産別の結果（図 10）を見ると、生活満足度は世帯金融資産が多いほど平均値が高い傾向がある一方で、生きがい感では世帯金融資産が多くなることに伴う傾向が捉えにくい。また、全体的に生きがい感と比較して生活満足度の平均値が高い。世帯金融資産が低い区分では、生きがい感と生活満足度との差が小さいが、世帯金融資産が多くなることに伴い、両者の差が大きくなる傾向がある。この差は、世帯金融資産が 500 万円未満の範囲において 5%水準で有意ではない。

雇用環境と賃金に関連した属性として、就業状況別（図 11）、現在の職業についている理由別（図 12）に区分した結果を示す。なお、現在の職業についている理由は、非正規雇用もしくは内職・在宅ワークと回答した人にもみ尋ねている。就業状況別の結果（図 11）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、非就業の平均値が最も高い。非就業を除くと、生活満足度の平均値は正社員、非正社員、自営業等の間に差が見られるが、生きがい感では 3 者間の差がほとんどない。また、正社員と非正社員は生活満足度の方が平均値が高いこと、反対に、自営業等では生きがい感の方が平均値が高いことに特徴がある。生きがい感と生活満足度の差は、正社員と非就業の区分において 5%水準で有意である。現在の職業についている理由別の結果（図 12）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、自分の希望や条件にあった仕事だからの区分と自分の希望や条件にあう仕事がないからの区分の間で平均値に大きな差がある。また、自分の希望や条件にあった仕事だからの区分では、生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高いが、自分の希望や条件にあう仕事がないからの区分では、生活満足度よりも生きがい感の方が平均が高い。自分の希望や条件にあった仕事だからの区分のみ、生きがい感と生活満足度の差が 5%水準で有意である。

仕事と生活（ワークライフバランス）に関連した属性として、世帯内の家族の有無別（図 13）、世帯内の 18 歳未満の子供の有無別（図 14）、家庭の満足度別（図 15）、仕事の満足度別（図 16）、仕事の出来（過去 1～2 年）別（図 17）、仕事の出来（過去 4 週間）別（図 18）の結果を示す。なお、家庭の満足度は、世帯に含まれる人がいると回答した人、仕事の満足度と仕事の出来は、仕事をしていると回答した人にもみ尋ねている。また、家庭の満足度、仕事の満足度、仕事の出来の点数の区分は、英国統計局が生活満足度を集計する際に使用している区分を参考に、0～4 点、5～6 点、7～8 点、9～10 点に区分した。家族の有無別の結果（図 13）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、家族有の方が平均値が高い。また、家族の有無に関わらず、生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高く、この差は 5%水準で有意である。子供の有無別の結果（図 14）を見ると、生活満足度は、子供無よりも子供有の方が若干平均値が高いが、生きがい感では両者の差がほとんどない。子供無、子供有ともに、生きがい感よりも生活満足度の方が若干平均値が高いが、この差は 5%水準で有意で

はない。家庭の満足度別の結果（図 15）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、家族の満足度が高いほど、平均値が高い傾向がある。区分内の生きがい感と生活満足度を比較すると、家庭の満足度 0～4 点の層では生きがい感の方が平均値が高いが、5～6 点で両者が同程度になり、7 点を超えると生活満足度の方が平均値が高い。両者の差は、家庭の満足度 5～6 点を除き、5%水準で有意である。仕事の満足度別の結果（図 16）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、仕事の満足度が高いほど、平均値が高い傾向が見られる。区分内の生きがい感と生活満足度を比較すると、仕事の満足度 0～4 点の層では生きがい感の方が平均値が若干高いが、5 点を超えると生活満足度の方が平均値が高い。両者の差は、仕事の満足度 5～6 点と 7～8 点において 5%水準で有意である。仕事の出来（過去 1～2 年間）別（図 17）と仕事の出来（過去 4 週間）別（図 18）の結果は同様の傾向が見られる。生きがい感、生活満足度ともに、仕事の出来が高いほど、平均値が高い傾向が見られる。区分内の生きがい感と生活満足度を比較すると、仕事の出来 0～4 点の層では生きがい感の方が平均値が高いが、5 点を超えると生活満足度の方が平均値が高い。両者の差は、仕事の出来 5 点以上において、5%水準で有意である。

健康状態に関連した属性として、主観的健康状態別（図 19）、ストレスの有無（図 20）、K6¹³（図 21）別に区分した結果を示す。主観的健康状態別の結果（図 19）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、主観的健康状態がよいほど、平均値が高い傾向がある。主観的健康状態がよくないの区分では、生活満足度よりも生きがい感の方が若干平均値が高いが、これ以外は、生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高い。両者の差は、主観的健康状態がよくないを除き、5%水準で有意である。ストレスの有無別の結果（図 20）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、ストレスがないほど、平均値が高い傾向がある。ストレスが大いにある（あった）の区分では、生活満足度よりも生きがい感の方が若干平均値が高いが、この区分以外は、生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高い。両者の差は、ストレスが大いにある（あった）を除き、5%水準で有意である。K6 別の結果（図 21）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、K6 が小さいほど、平均値が高い傾向がある。どの区

¹³ 米国の Ronald C. Kessler らによって、うつ病・不安障害などの精神疾患をスクリーニングすることを目的として開発され、一般住民を対象とした調査で心理的ストレスを含む何らかの精神的な問題の程度を表す指標として広く利用されている。「神経過敏に感じましたか」「絶望的だと感じましたか」「そわそわ、落ち着かなく感じましたか」「気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じましたか」「何をするのも骨折りだと感じましたか」「自分は価値のない人間だと感じましたか」の 6 つの質問について 5 段階（「まったくない」（0 点）、「少しだけ」（1 点）、「ときどき」（2 点）、「たいてい」（3 点）、「いつも」（4 点））で点数化し、合計点数が高いほど、精神的な問題がより重い可能性があるとされている。厚生労働省の国民生活基礎調査では、「0～4 点」「5～9 点」「10～14 点」「15 点以上」に区分して集計している。

分においても、生きがい感よりも生活満足度の平均値が高いが、両者の差が5%水準で有意であるのは4点以下の区分のみである。

自身の教育水準・教育環境に関連した属性として、最終学歴別（図 22）に区分した結果を示す。中学校卒業・見込みは、他の区分と比較して、生きがい感、生活満足度ともに平均値が低い。中学校卒業・見込みを除くと、学歴が高くなることに伴う傾向が捉えにくい。区分内の生きがい感と生活満足度を比較すると、中学校卒業と専門学校卒業は両者の間にほとんど差がないが、高等学校卒業、高専・短大卒業、大学卒業、大学院卒業は、生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高い。両者の差は、高等学校卒業、大学卒業において5%水準で有意である。

交友関係やコミュニティなど社会とのつながりに関連した属性として、ボランティア活動等への参加有無別（図 23）、友人等との交流有無別（図 24）、困った時に頼りになる人の有無別（図 25）、UCLA-SF3¹⁴別（図 26）、ほとんどの人への信頼度別（図 27）、知人への信頼度別（図 28）、悩みやストレスを相談できる人の有無別（図 29）に区分した結果を示す。ここで、信頼度の点数の区分は、英国統計局が生活満足度を集計する際に使用している区分を参考に、0～4点、5～6点、7～8点、9～10点に区分した。ボランティア活動等への参加有無別の結果を見ると（図 23）、生きがい感、生活満足度ともに、参加している方が平均値が高い。また、参加の有無に関わらず、生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高く、この差は5%水準で有意である。友人との交流有無別の結果（図 24）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、交流している方が平均値が高い。また、交流の有無に関わらず、生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高く、この差は5%水準で有意である。困った時に頼りになる人の有無別の結果（図 25）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、いる方が平均値が高い。区分内の生きがい感と生活満足度を比較すると、いるの区分では生活満足度の平均値の方が高いが、いないの区分では生きがい感の平均値の方が若干高い。両者の差はいるの区分で5%水準で有意である。UCLA-SF3 別の結果（図 26）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、UCLA-SF3 が小さいほど、平均値が高い傾向が見られる。どの区分においても、生きがい感よりも生活満足度の平均値が高いが、両者の差が5%水準で有意

¹⁴ 心理学者 Daniel Russell が考案した「UCLA 孤独感尺度」の日本語版の3項目短縮版に基づくもので、孤独感の高さを評価する指標である。「あなたは、自分には人とのつきあいがいと感じるがありますか」「あなたは、自分は取り残されていると感じるがありますか」「あなたは、自分は他の人たちから孤立していると感じるがありますか」の3つの質問について、4段階（「決してない」（1点）、「ほとんどない」（2点）、「時々ある」（3点）、「常にある」（4点））で点数化し、合計点数が高いほど、孤独感が高いとされる。内閣府の孤独・孤立の実態把握に関する全国調査では、「3点」「4～6点」「7～9点」「10～12点」に区分して集計している。

であるのは 7～9 点、4～6 点の区分である。ほとんどの人への信頼度別（図 27）と知人への信頼度別（図 28）の結果は同様の傾向が見られる。生きがい感、生活満足度ともに、信頼度が高いほど、平均値が高い傾向が見られる。区分内の生きがい感と生活満足度を比較すると、いずれの区分においても、生活満足度の方が平均値が高い。両者の差は、信頼度 5～6 点、7～8 点において、5%水準で有意である。悩みやストレスを相談できる人の有無別の結果（図 29）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、いないの区分と比較して、いるや相談する必要がないの区分の方が平均値が高い。いないの区分では生きがい感と生活満足度の差がほとんど無いが、いると相談する必要がないの区分では生きがい感よりも生活満足度の方が高い。両者の差は、いると相談する必要がないの区分において 5%水準で有意である。

政治・行政・裁判所への信頼性に関連する属性として、国会の信頼度別（図 30）、警察の信頼度別（図 31）、行政サービスの信頼度別（図 32）の結果を示す。ここで、信頼度の点数の区分は、英国統計局が生活満足度を集計する際に使用している区分を参考に、0～4 点、5～6 点、7～8 点、9～10 点に区分した。国会への信頼度別の結果を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、信頼度が高いほど、平均値が高い傾向がある。いずれの区分においても、生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高い。この差は、信頼度が 9～10 点の区分を除き、5%水準で有意である。警察への信頼度別の結果（図 31）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、信頼度が高いほど、平均値が高い傾向がある。いずれの区分においても、生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高い。この差は、信頼度が 0～4 点、わからないの区分を除き、5%水準で有意である。行政サービスへの信頼度別の結果（図 32）を見ると、生きがい感、生活満足度ともに、信頼度が高いほど、平均値が高い傾向がある。信頼度が 9～10 点を除き、いずれの区分においても、生きがい感よりも生活満足度の方が平均値が高い。この差は、信頼度が 0～4 点、9～10 点の区分を除き、5%水準で有意である。

なお、重回帰分析において 10%水準未満で有意となった生活分野のうち、住宅、生活を取り巻く空気や水などの自然環境、介護のしやすさ・されやすさ、生活の楽しさ・面白さは関連する設問がない。

本稿の統計解析には R（version 4.2.3）を使用した。

4. 考察

本稿では、0～10 点の尺度により直接生きがい感を尋ねた結果を用いて、同様に 0～10 点の尺度で測定した生活満足度との比較を行った。生きがい感と生活満足度の基本統計量をみると、全体的に生きがい感よりも生活満足度の平均値の方が高く、生きがい感の最頻値は 5 点、生活満足度の最頻値は 8 点であった。これは、内閣府が 2025 年に実施した生活満足度調査の結果と同様の傾向を示している。2025 年の生活満足度調査では、エウダイモニアに関連する主観指標に対する評価の全体の平均値は、生活満足度よりも低くなっており、エウダイモニアに関連する主観指標に対する評価の最頻値は 5 点、生活満足度の最頻値は 8 点であった。

また、本稿では、生きがい感、および生活満足度をそれぞれ被説明変数とし、13 分野の分野別主観満足度を説明変数として重回帰分析を行った。その結果、生きがい感と生活満足度の両者に共通して関係する生活分野、生きがい感のみに関係する生活分野、生活満足度のみに関係する生活分野があることがわかった。

長谷川他 (2001) によると、これまでの生きがいに関する研究は、文献調査による概念整理や概念構造の検討が中心であった。また、実証分析を行うものであっても、高齢者を対象とするなど対象者や規模が限定的であった¹⁵。これに対し、本稿は、全国規模で 15～89 歳の幅広い年齢層を対象に「生きがい感」を測定するとともに、同一の尺度で測定した生活満足度との比較により、体系的に分析を行った点に特徴がある。

本稿では、重回帰分析の結果を用いて、係数が 10%水準未満で有意となった生活分野に着目し、「生きがい」が具体的にどのような生活分野の指標から説明できるのかを示した。生きがい感のみに影響する生活分野は、政治・行政・裁判所への信頼性と生活を取り巻く空気や水などの自然環境であり、生活満足度のみに影響する生活分野は、雇用環境と賃金、住宅、自身の教育水準・教育環境であった。また、両方に共通して影響する分野は、家計と資産、仕事と生活（ワークライフバランス）、健康状態、交友関係やコミュニティなど社会とのつながり、介護のしやすさ・されやすさ、生活の楽しさ・面白さであった。これらの結果は、生きがい感と生活満足度を同一データ内で比較することにより、生きがい感が生活満足度とは異なる生活分野と関連する可能性を示したものといえる。

¹⁵ 近年のものでは、例えば、Tsujishita et al. (2022)による高齢者（平均年齢 75.1 歳）における身体的、認知的、社会的フレイルの重複が「生きがい」に影響を与えるかどうかを分析した研究や、Goto et al. (2024)による 65 歳以上の高齢者における「生きがい」について身体的、心理的、社会的な側面から包括的に分析した研究、Kogure et al. (2024)による在宅医療・介護を受けている 75 歳以上の訪問リハビリテーション利用者における「生きがい」に影響を与える要因を分析した研究がある。

また、本稿の重回帰分析の結果からは、次のことが示唆される。まず、経済状況、健康状態、交友関係に関わる生活分野は、生きがい感と生活満足度の両者と結びついていると考えられる。そして、生きがい感は、特に、政治・行政・裁判所への信頼性と生活を取り巻く空気や水などの自然環境といった「周辺環境との関わり」とより結びついている傾向が見られた。一方で、生活満足度は、特に、雇用環境と賃金、住宅、自身の教育水準・教育環境といった「自身の状態」とより結びついている傾向が見られた。今井他（2009）は、「生きがい」について、概念構造の仮説を構築し、仮説の検証、および主観的 well-being¹⁶との相違点を考察するために、「生きがい」の考え方を次のように整理した。「生きがい」は、「現状の生活・人生に対する楽天的・肯定的な感情」、「未来に対する積極的・肯定的な態度」、および「他者（社会）との関係における自己存在の意味の肯定的認識」から構成されるとした。本稿の結果は、このうち、特に社会（制度・環境）側の要因が、生活満足度と比較して「生きがい感」により関係している可能性を示唆している。このことから、生きがい感は、個人の生活条件や主観的満足だけでなく、社会や制度との関係性を含む、より広い枠組みの中で形成される指標である可能性が考えられる。

さらに、本稿では、重回帰分析からわかった、生きがい感や生活満足度に影響する生活分野を対象に、世帯年収や雇用形態、健康状態といった様々な属性の区分ごとに、生きがい感と生活満足度を比較した。その結果、多くの層で、生きがい感よりも生活満足度の方が高い傾向が見られることがわかった。一方で、経済的・社会的・健康面において不安定な状況にある層（世帯年収が区分間で相対的に低い層、非正社員の層、健康状態が悪い層、ストレスが大きい層、周囲の人々への信頼度が低い層、孤独感がある層等）では、生きがい感と生活満足度の間に有意な差が見られない傾向があった。これは、生きがい感と生活満足度の関係が一樣ではなく、個人を取り巻く社会経済的状况や健康状態、心理的要因によって異なる可能性を示唆していると考えられる。しかし、生きがい感よりも生活満足度が高い要因については、本分析からは明らかにできなかった。

ただし、本稿で実施した分析では、アンケート調査のサンプルサイズの制約から、属性の区分ごとに比較する際に、該当する属性以外の条件は統制していない。今後、十分なサンプルサイズを確保した上で、比較対象群の各種条件を統制した分析を行うことが課題である。また、ESRI 調査において「生きがい感」を測定したのは今回が初めてであり、継続したデータ収集と分析を行い、引き続き検証が必要である。

¹⁶ 論文の中では「主観的幸福感（Subjective Well-being：SWB）」という表現が用いられている。

5. おわりに

本稿では、0～10点の尺度を用いて測定した生きがい感と生活満足度を比較し、両者に影響を与える生活分野の違いや属性ごとの傾向について分析を行った。

重回帰分析の結果からは、家計と資産、仕事と生活（ワークライフバランス）、健康状態、交友関係やコミュニティなど社会とのつながりといった分野が両者に共通して関係する一方で、政治・行政・裁判所への信頼性や自然環境といった制度・環境面の評価が、生きがい感に生活満足度よりも相対的に強く関係することが示された。このことは、生きがい感が、個人の生活条件や主観的満足だけでなく、社会や制度との関係性を含む、より広い枠組みの中で形成される指標である可能性を示唆していると考ええる。

また、属性別の分析からは、多くの層において生きがい感よりも生活満足度の方が高い傾向が見られた一方、経済的・社会的・健康面において相対的に不安定な状況にある層では、両者の差が小さくなる傾向が確認された。このことは、生きがい感と生活満足度の関係が一樣ではなく、個人を取り巻く社会経済的状況や健康状態、心理的要因によって異なる可能性を示唆していると考ええる。

ただし、本稿で行った属性別比較は、該当する属性以外の条件を統制した分析はできていない。今後は、サンプルサイズを拡大した上で、より精緻な統計手法を用いた分析が求められる。また、ESRI 調査において生きがい感を測定したのは今回が初めてであり、継続したデータ収集と分析を行い、引き続き検証が必要である。

参考文献

Takaharu G., Shinji F., Tomoya K., Takashi M., Mio K., Yasuhiko S., & Tetsuo I. (2024). Biopsychosocial Consideration of Ikigai in Older Adults in Japan through a Cross-Sectional Study. *Geriatrics*, 9(3), 78.

Mahoney, J. (2023), Subjective well-being measurement: Current practice and new frontiers, OECD Papers on Well-being and Inequalities, No. 17, Paris: OECD Publishing.

Eisuke K., Takeshi O., Yuta S., & Tsuyoshi H. (2024), Factors Related to Ikigai among Home-visit Rehabilitation Users Aged 75 Years and Older Receiving Home Medical and Nursing Care in Japan, *Physical Therapy Research*, No. 27, pp.144-150.

OECD (2013), OECD Guidelines on Measuring Subjective Well-being, Paris: OECD Publishing.

OECD (2025), OECD Guidelines on Measuring Subjective Well-being (2025 Update), Paris: OECD Publishing.

Soma T., Masaki N., & Kiyoshi S. (2022), Overlap of Physical, Cognitive, and Social Frailty Affects Ikigai in Community-Dwelling Japanese Older Adults, *Healthcare*, 10(11), 2216.

今井忠則・長田久雄・西村芳貢 (2009) , 60 歳以上退職者の生きがい概念の構造－生きがい概念と主観的幸福感の相違－, 老年社会科学, 第 31 巻第 3 号, pp.366-377.

今井忠則・長田久雄・西村芳貢 (2012) , 生きがい意識尺度 (Ikigai-9) の信頼性と妥当性の検討, 日本公衆衛生雑誌, 第 59 巻第 7 号, pp.433-439.

熊野道子 (2017) , 乳幼児の父親・母親における子ども誕生後の生きがい感の変化 -生きがい感に対する考え方と生きがいプロセスからの検討-, 大阪大谷大学紀要, 第 52 巻, pp.121-135.

古谷野亘 (1981) , 生きがいの測定 -改訂 PGC モラール・スケールの分析-, 老年社会科学, 第 3 巻, pp. 83-95.

佐藤文子・山口浩・斎藤俊一・田中弘子・千葉征慶・岡堂哲雄（1993），日本版 P I L の妥当性，信頼性の検討, *Artes Liberales*, 第 52 号, pp.85-97.

内閣府 政策統括官（経済社会システム担当），満足度・生活の質に関する調査報告 2025－我が国の Well-being の動向－,
<https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/manzoku/reportarchive.html>（2026 年 8 月 4 日閲覧）

長谷川明弘・藤原佳典・星旦二（2001），高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察 -生きがい・幸福感との関連を中心に-, *総合都市研究*, 第 75 号, pp.147-170.

参考図表

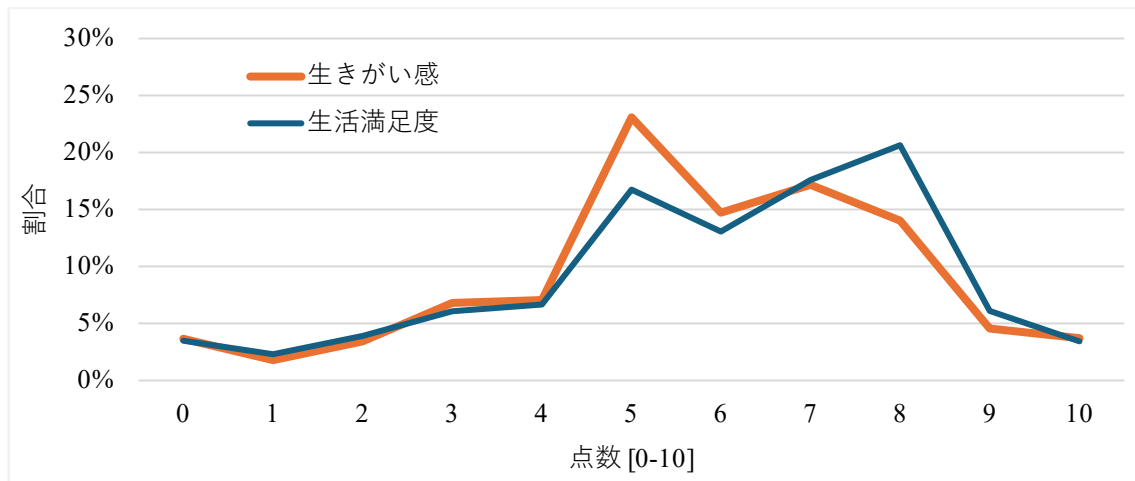


図1 生きがい感と生活満足度の分布（全体）

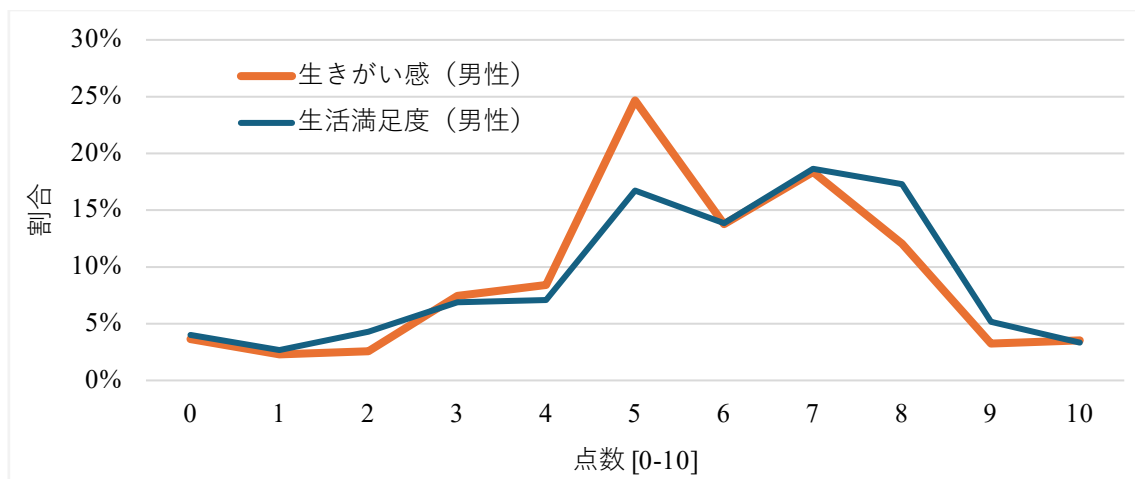


図2 生きがい感と生活満足度の分布（男性）

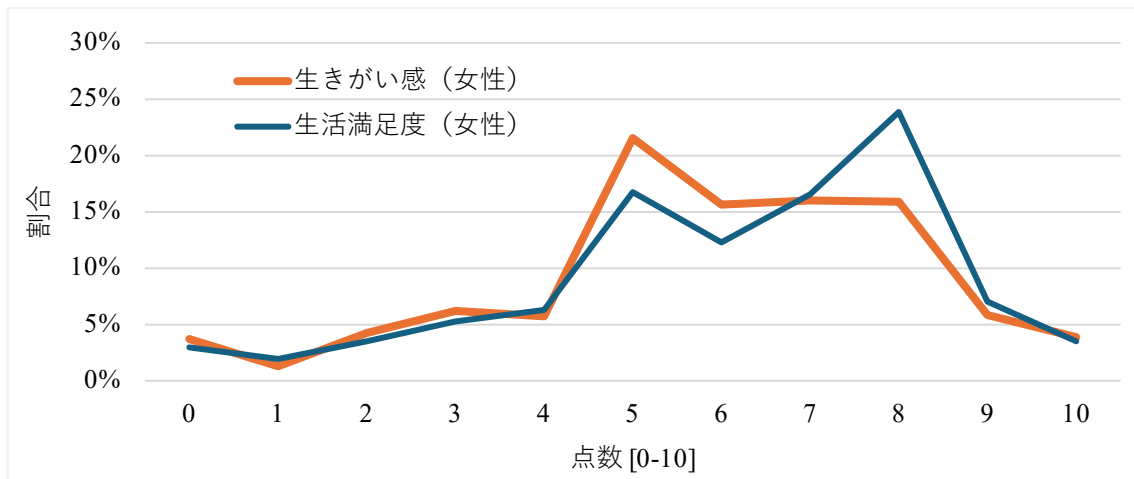


図3 生きがい感と生活満足度の分布（女性）

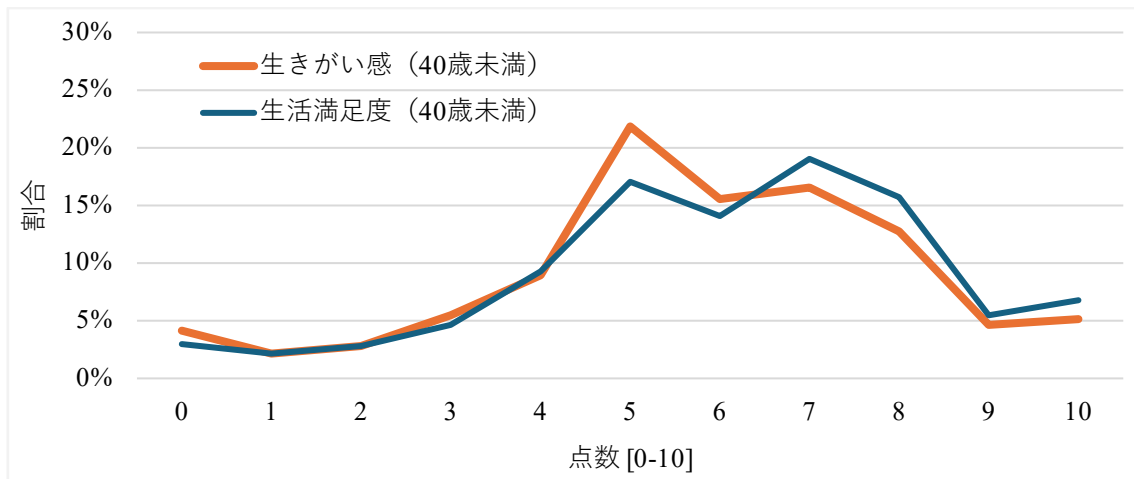


図4 生きがい感と生活満足度の分布（40歳未満）

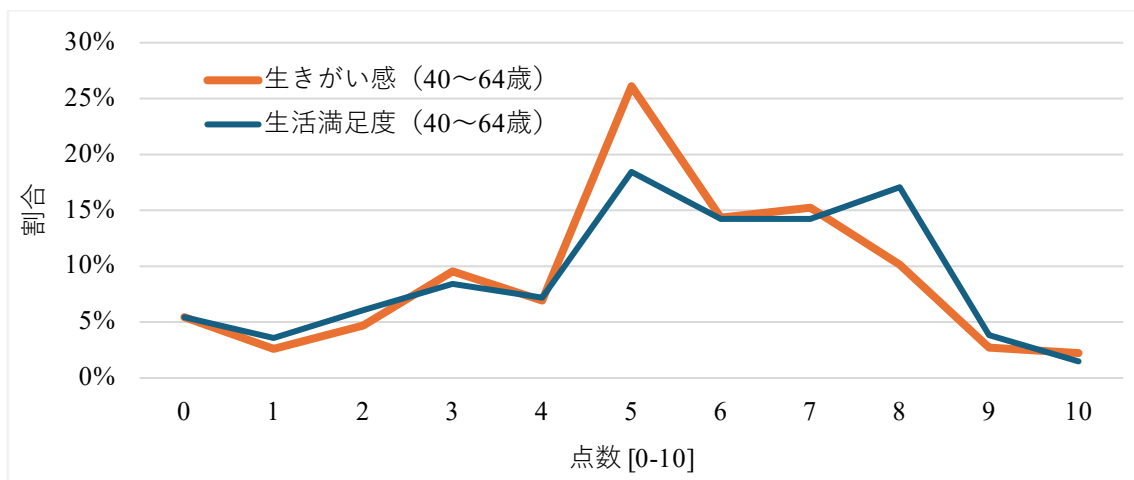


図5 生きがい感と生活満足度の分布（40～64歳）

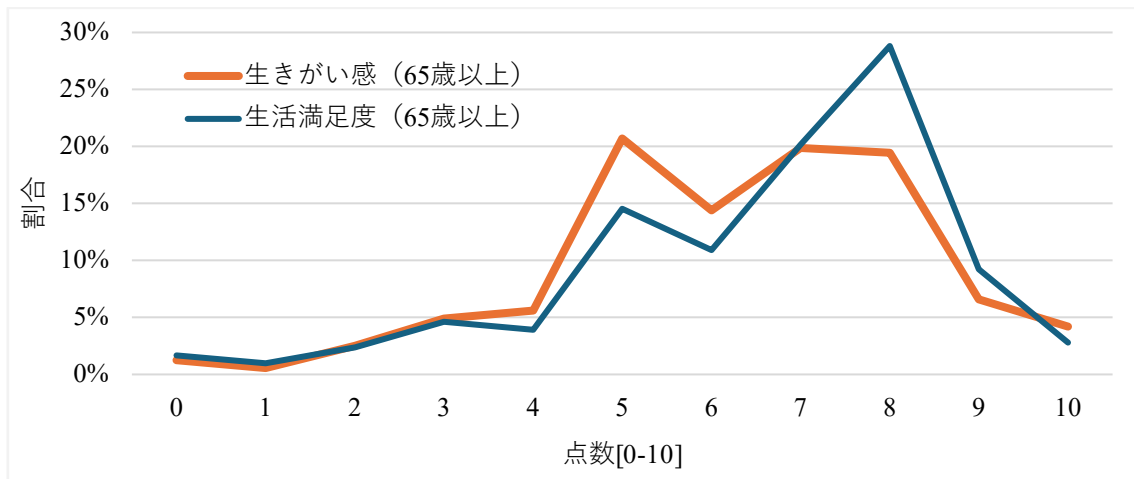
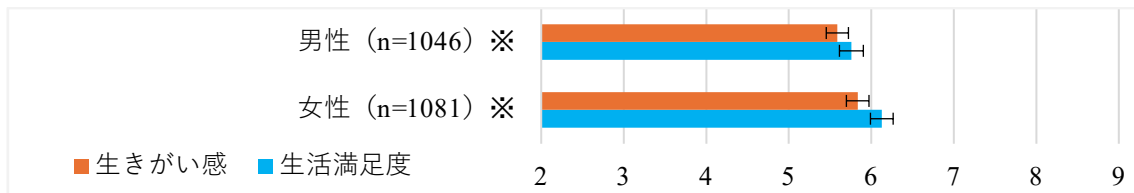
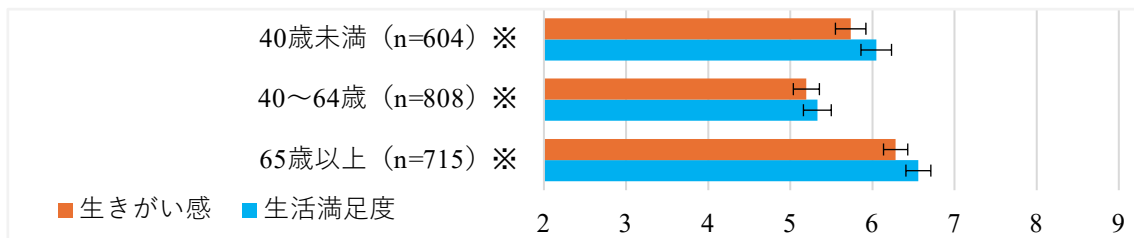


図6 生きがい感と生活満足度の分布 (65歳以上)



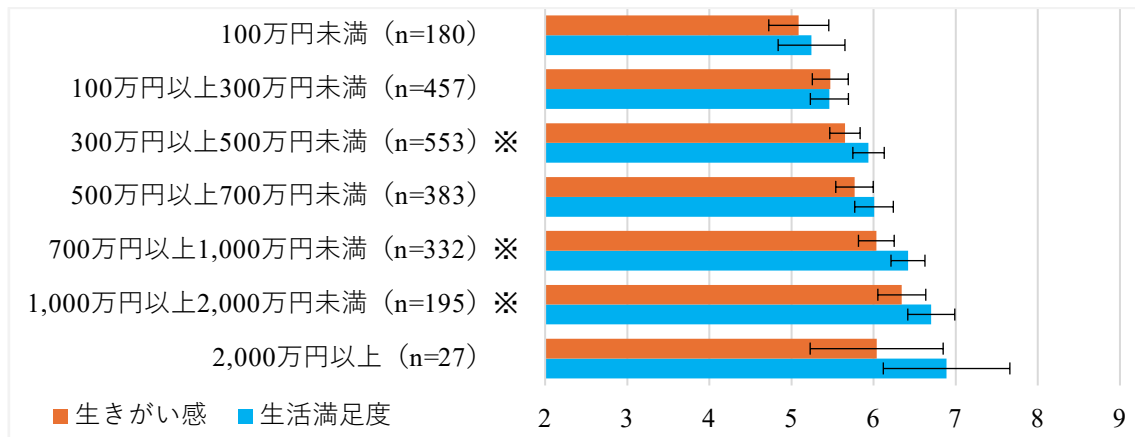
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図7 生きがい感と生活満足度の平均値 (男女別)



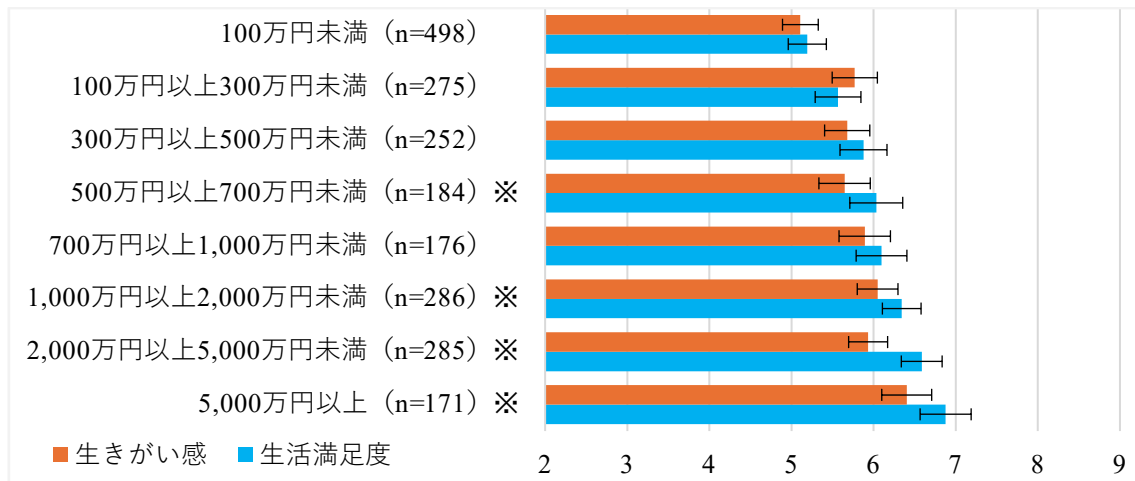
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図8 生きがい感と生活満足度の平均値 (年齢階層別)



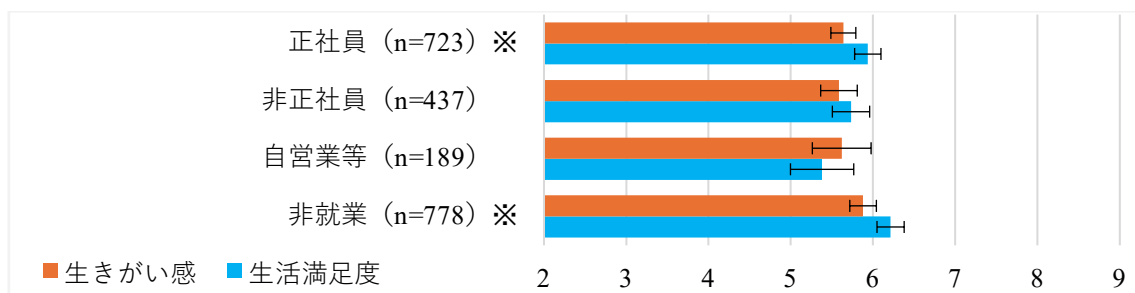
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図9 生きがい感と生活満足度の平均値（世帯年収別）



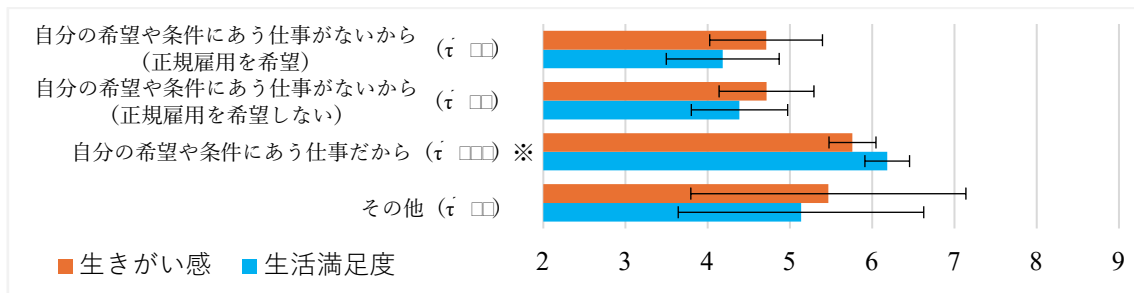
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図10 生きがい感と生活満足度の平均値（世帯金融資産別）



「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図11 生きがい感と生活満足度の平均値（就業状況別）



「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 12 生きがい感と生活満足度の平均値（現在の職業についている理由別）



「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 13 生きがい感と生活満足度の平均値（世帯内の家族の有無別）

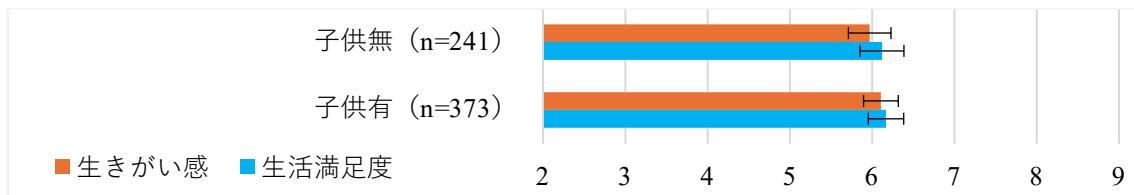
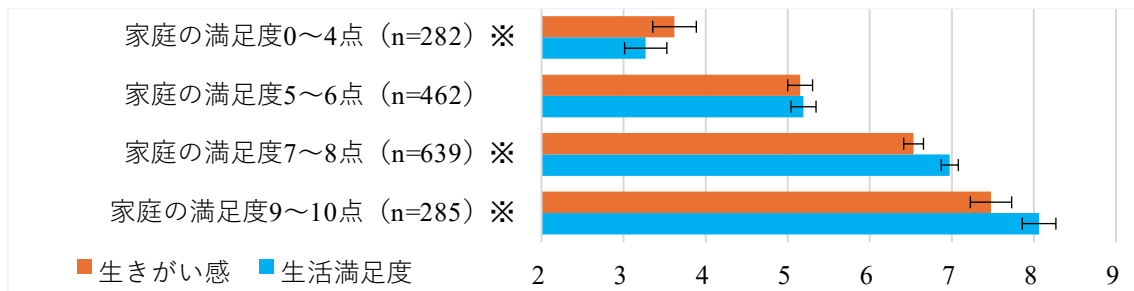


図 14 生きがい感と生活満足度の平均値（世帯内の18歳未満の子供の有無別）



「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 15 生きがい感と生活満足度の平均値（家庭の満足度別）

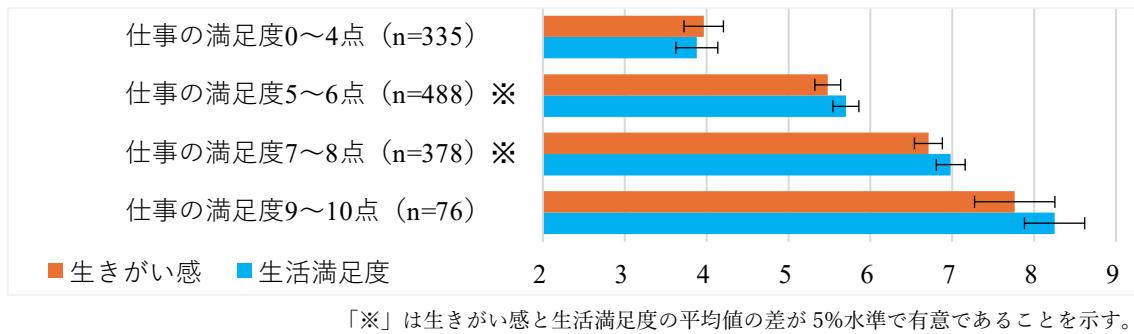


図 16 生きがい感と生活満足度の平均値（仕事の満足度別）

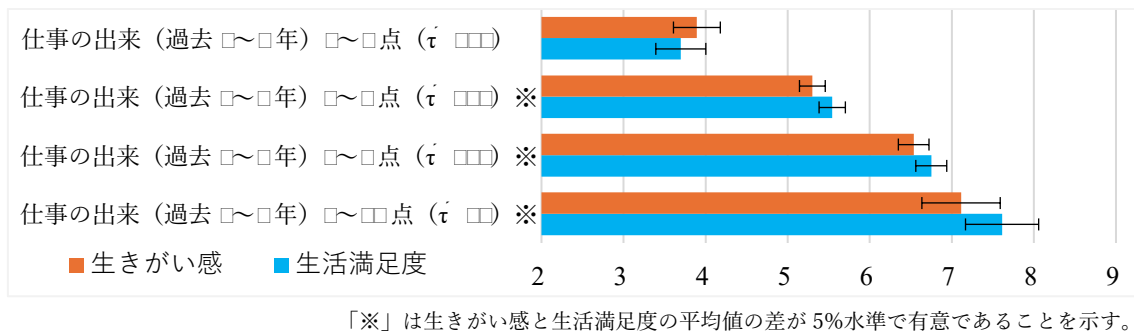


図 17 生きがい感と生活満足度の平均値（過去 1～2 年の仕事の出来別）

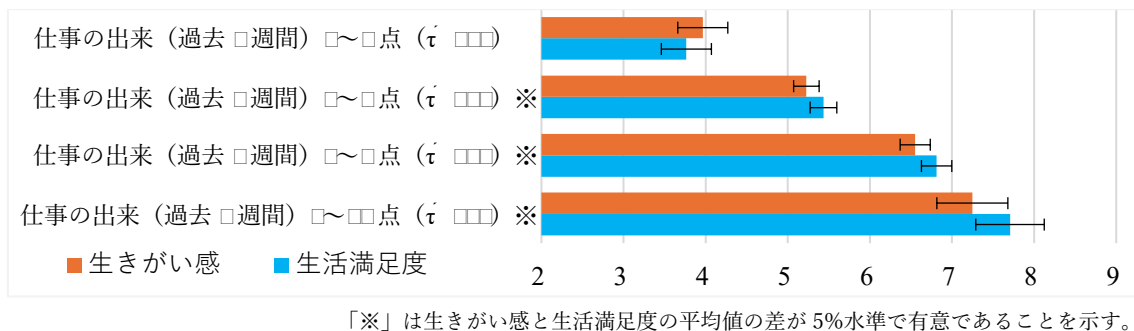


図 18 生きがい感と生活満足度の平均値（過去 4 週間の仕事の出来別）

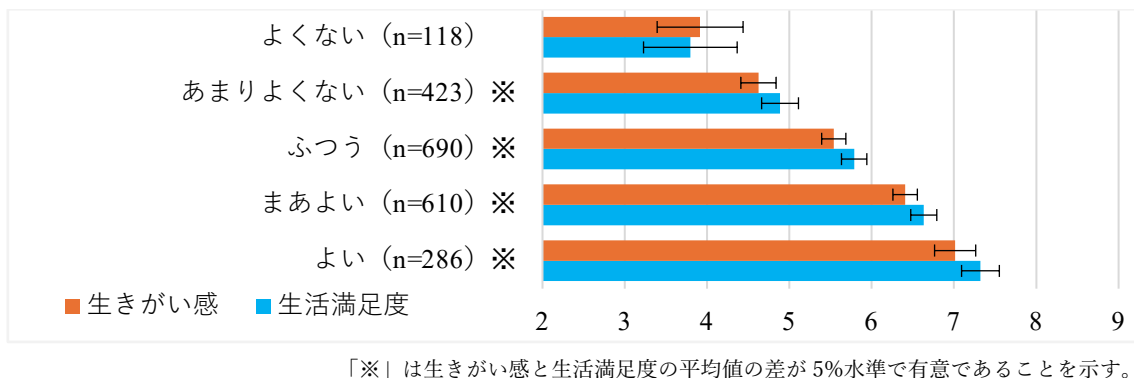
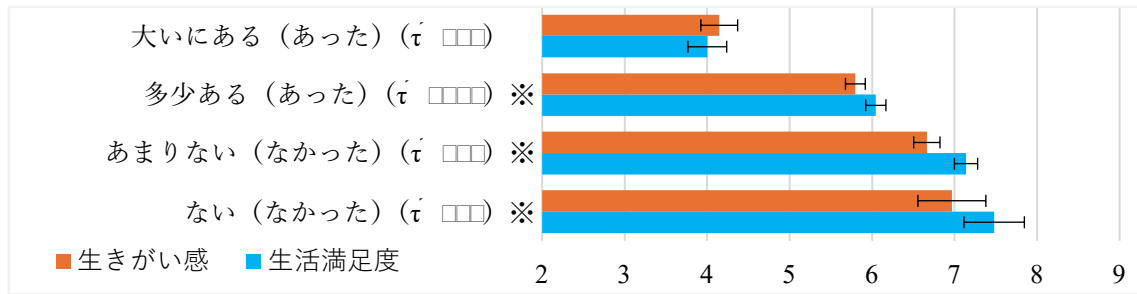
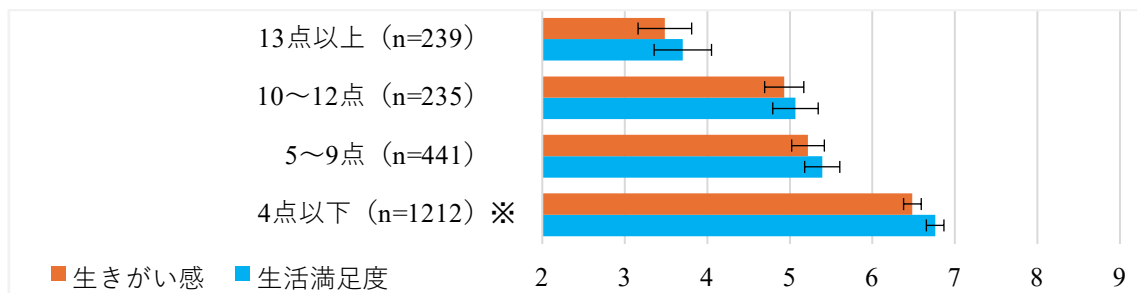


図 19 生きがい感と生活満足度の平均値（主観的健康状態別）



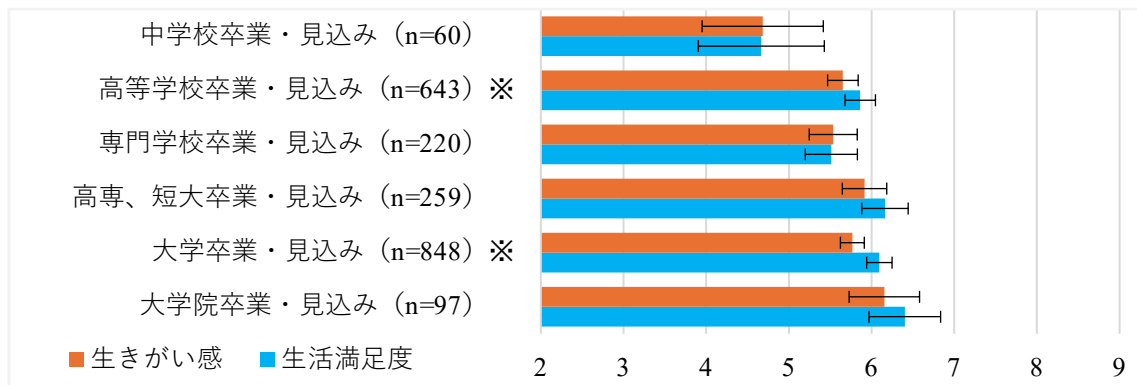
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 20 生きがい感と生活満足度の平均値 (ストレスの有無別)



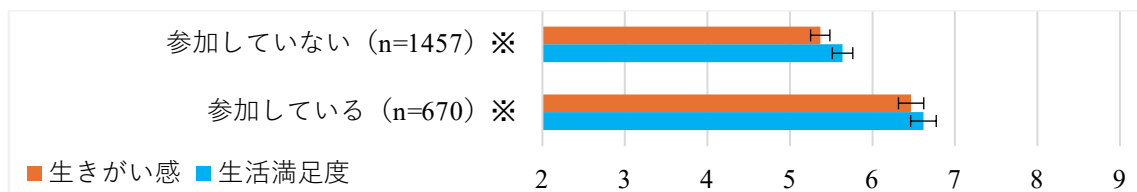
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 21 生きがい感と生活満足度の平均値 (K6 別)



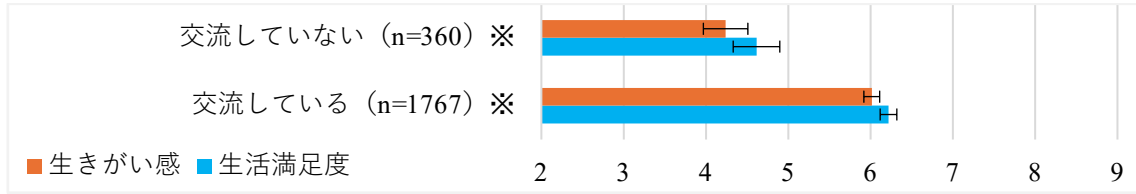
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 22 生きがい感と生活満足度の平均値 (最終学歴別)



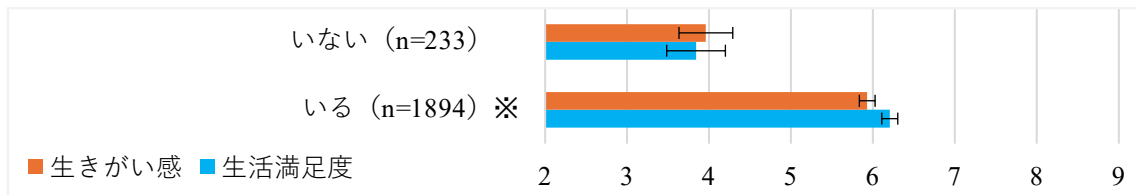
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 23 生きがい感と生活満足度の平均値 (ボランティア活動等への参加の有無別)



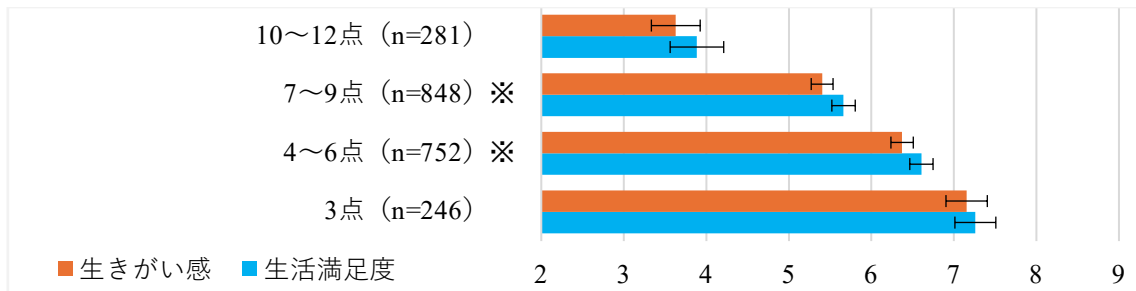
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 24 生きがい感と生活満足度の平均値（友人等との交流の有無別）



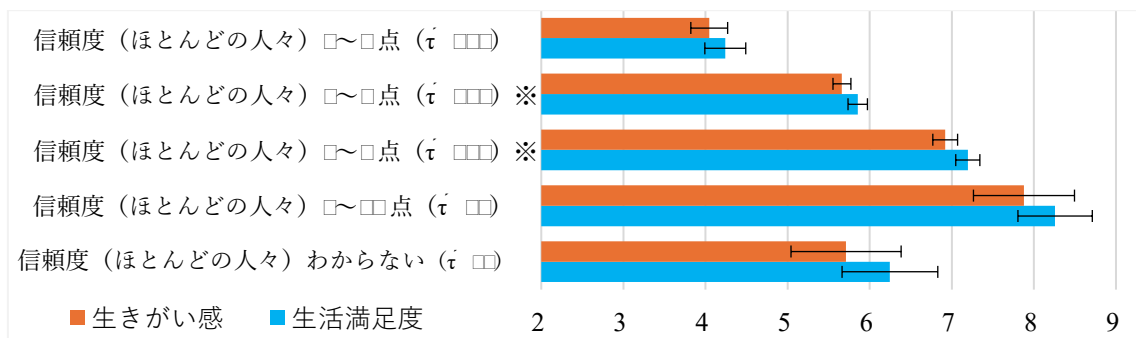
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 25 生きがい感と生活満足度の平均値（困ったときに頼りになる人の有無別）



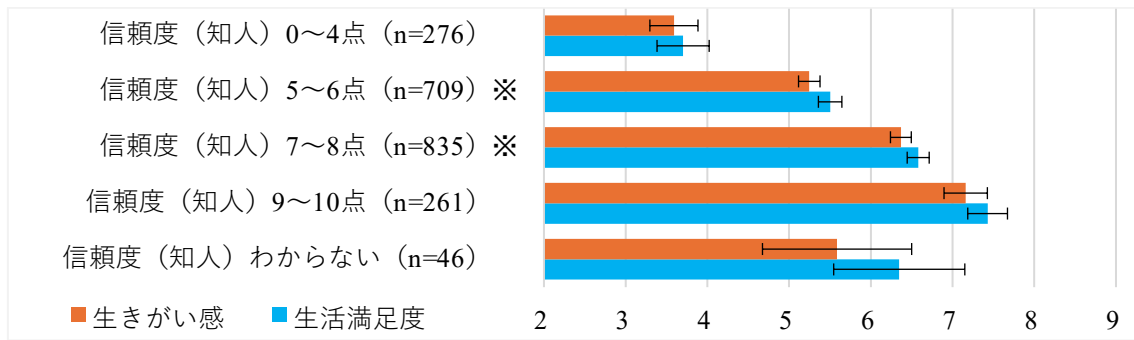
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 26 生きがい感と生活満足度の平均値（UCLA-SF3 別）



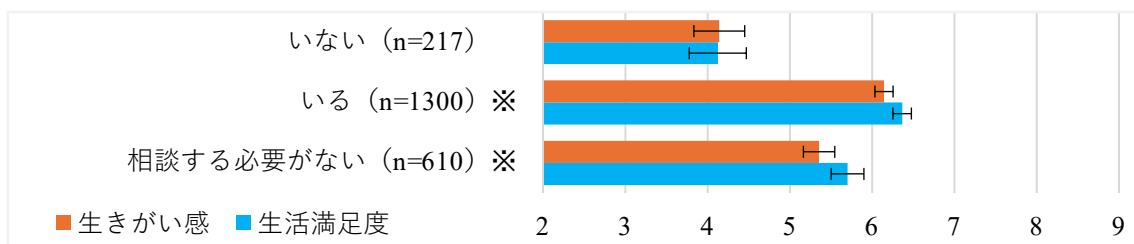
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 27 生きがい感と生活満足度の平均値（ほとんどの人への信頼度別）



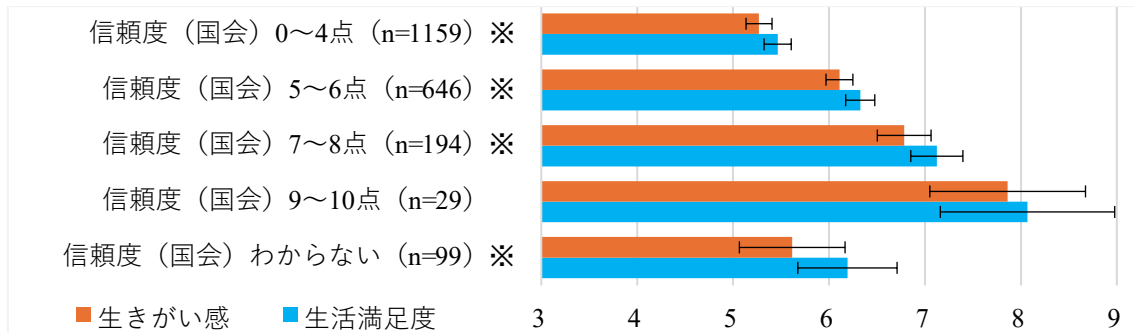
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 28 生きがい感と生活満足度の平均値（知人への信頼度別）



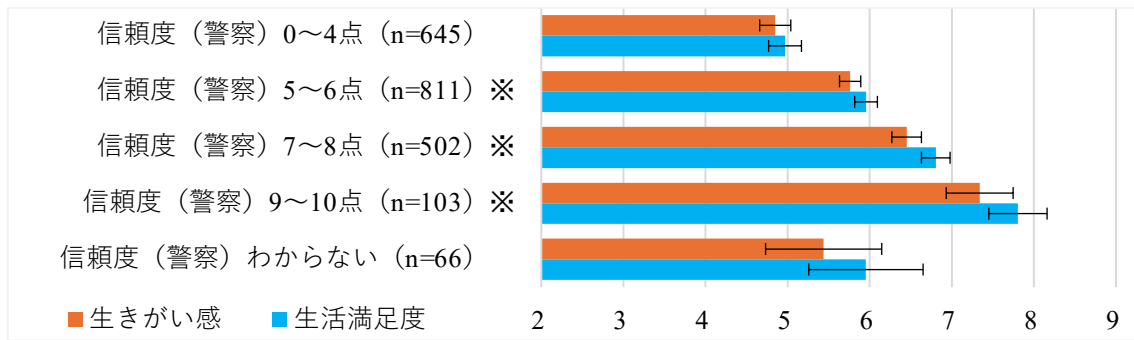
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 29 生きがい感と生活満足度の平均値（悩みやストレスを相談できる人の有無別）



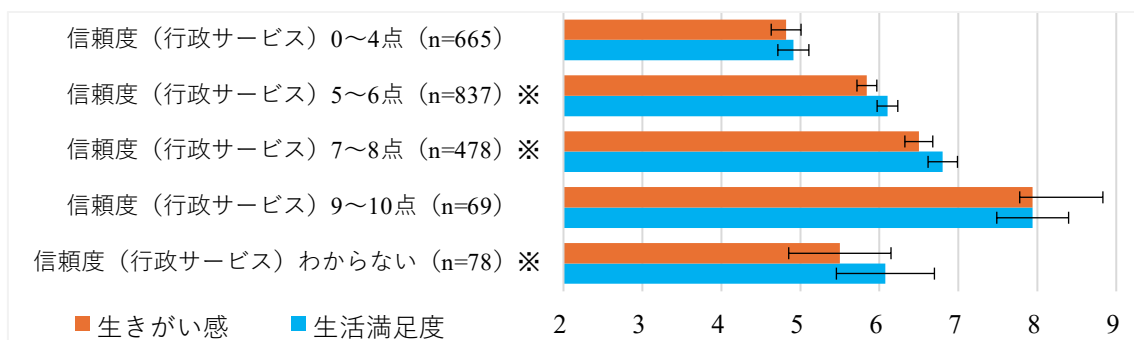
「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 30 生きがい感と生活満足度の平均値（国会の信頼度別）



「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 31 生きがい感と生活満足度の平均値（警察の信頼度別）



「※」は生きがい感と生活満足度の平均値の差が5%水準で有意であることを示す。

図 32 生きがい感と生活満足度の平均値（行政サービスの信頼度別）

表1 ESRI 調査の回答者の分布と令和2年国勢調査の人口分布の比較

		15-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-89	計	15-39	40-64	65-89	計
		歳	歳	歳	歳	歳	歳	歳		歳	歳	歳	
ESRI 調査	男	2.6%	5.5%	6.4%	8.7%	7.8%	7.4%	10.7%	49.2%	14.6%	19.5%	15.1%	49.2%
	女	2.4%	5.4%	6.1%	8.2%	8.0%	7.6%	13.2%	50.8%	13.8%	18.5%	18.5%	50.8%
	計	5.0%	10.9%	12.5%	16.9%	15.8%	15.0%	23.9%	100.0%	28.4%	38.0%	33.6%	100.0%
令和2年 国勢調査	男	2.7%	5.8%	6.6%	8.5%	7.7%	7.1%	10.2%	48.6%	15.1%	19.6%	13.9%	48.6%
	女	2.6%	5.5%	6.4%	8.4%	7.7%	7.4%	13.3%	51.4%	14.6%	19.6%	17.2%	51.4%
	計	5.3%	11.3%	13.0%	16.9%	15.4%	14.5%	23.5%	100.0%	29.6%	39.2%	31.1%	100.0%

表2 生きがい感と生活満足度の基本統計量（全体、男女別、年齢階層別）

	サンプルサイズ	生きがい感				生活満足度			
		中央値	最頻値	平均値	標準偏差	中央値	最頻値	平均値	標準偏差
全体	2,127	6	5	5.71	2.26	6	8	5.95	2.35
男性	1,046	6	5	5.59	2.22	6	7	5.76	2.39
女性	1,081	6	5	5.84	2.29	7	8	6.13	2.30
40歳未満	604	6	5	5.74	2.32	6	7	6.05	2.33
40～64歳	808	5	5	5.20	2.30	6	5	5.33	2.45
65歳以上	715	7	5	6.28	2.01	7	8	6.56	2.07

表3 生きがい感と生活満足度のクロス表

生きがい感

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
生活満足度	0	1.9%	0.2%	0.1%	0.3%	0.2%	0.4%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	3.5%
	1	0.3%	0.9%	0.5%	0.1%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.3%
	2	0.3%	0.4%	0.6%	0.8%	0.6%	0.8%	0.2%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	3.9%
	3	0.2%	0.0%	0.8%	1.7%	1.1%	1.2%	0.5%	0.2%	0.2%	0.0%	0.1%	6.1%
	4	0.2%	0.0%	0.3%	1.1%	1.6%	2.2%	0.8%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%
	5	0.2%	0.0%	0.5%	1.4%	1.5%	8.8%	2.2%	1.3%	0.7%	0.1%	0.1%	16.7%
	6	0.1%	0.0%	0.1%	0.7%	1.2%	3.9%	3.8%	2.3%	0.8%	0.2%	0.0%	13.1%
	7	0.1%	0.0%	0.2%	0.3%	0.4%	2.8%	4.2%	6.3%	2.5%	0.6%	0.1%	17.6%
	8	0.1%	0.0%	0.3%	0.3%	0.4%	2.2%	2.6%	5.7%	6.8%	1.2%	1.0%	20.6%
	9	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.5%	0.2%	0.7%	2.1%	1.8%	0.5%	6.1%
	10	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.1%	0.1%	0.6%	0.4%	1.8%	3.4%
	3.7%	1.8%	3.4%	6.8%	7.1%	23.1%	14.7%	17.2%	14.0%	4.6%	3.7%		

0%5%

表4 重回帰分析の結果

説明変数	生きがい感		生活満足度	
	標準化偏回帰係数		標準化偏回帰係数	
1. 家計と資産	0.082	***	0.200	***
2. 雇用環境と賃金	0.025		0.039	*
3. 住宅	0.034		0.126	***
4. 仕事と生活（ワークライフバランス）	0.053	**	0.050	**
5. 健康状態	0.111	***	0.085	***
6. 自身の教育水準・教育環境	0.037		0.052	***
7. 交友関係やコミュニティなど社会とのつながり	0.160	***	0.129	***
8. 政治・行政・裁判所への信頼性	0.054	***	0.003	
9. 生活を取り巻く空気や水などの自然環境	-0.067	***	-0.013	
10. 身の回りの安全	0.014		0.011	
11. 子育てのしやすさ	0.027		-0.002	
12. 介護のしやすさ・されやすさ	-0.084	***	-0.065	***
13. 生活の楽しさ・面白さ	0.420	***	0.349	***
定数項	0.000		0.000	
調整済み決定係数	0.586		0.702	
サンプルサイズ	2,127		2,127	

p<0.01:***, p<0.05:**, p<0.1:*